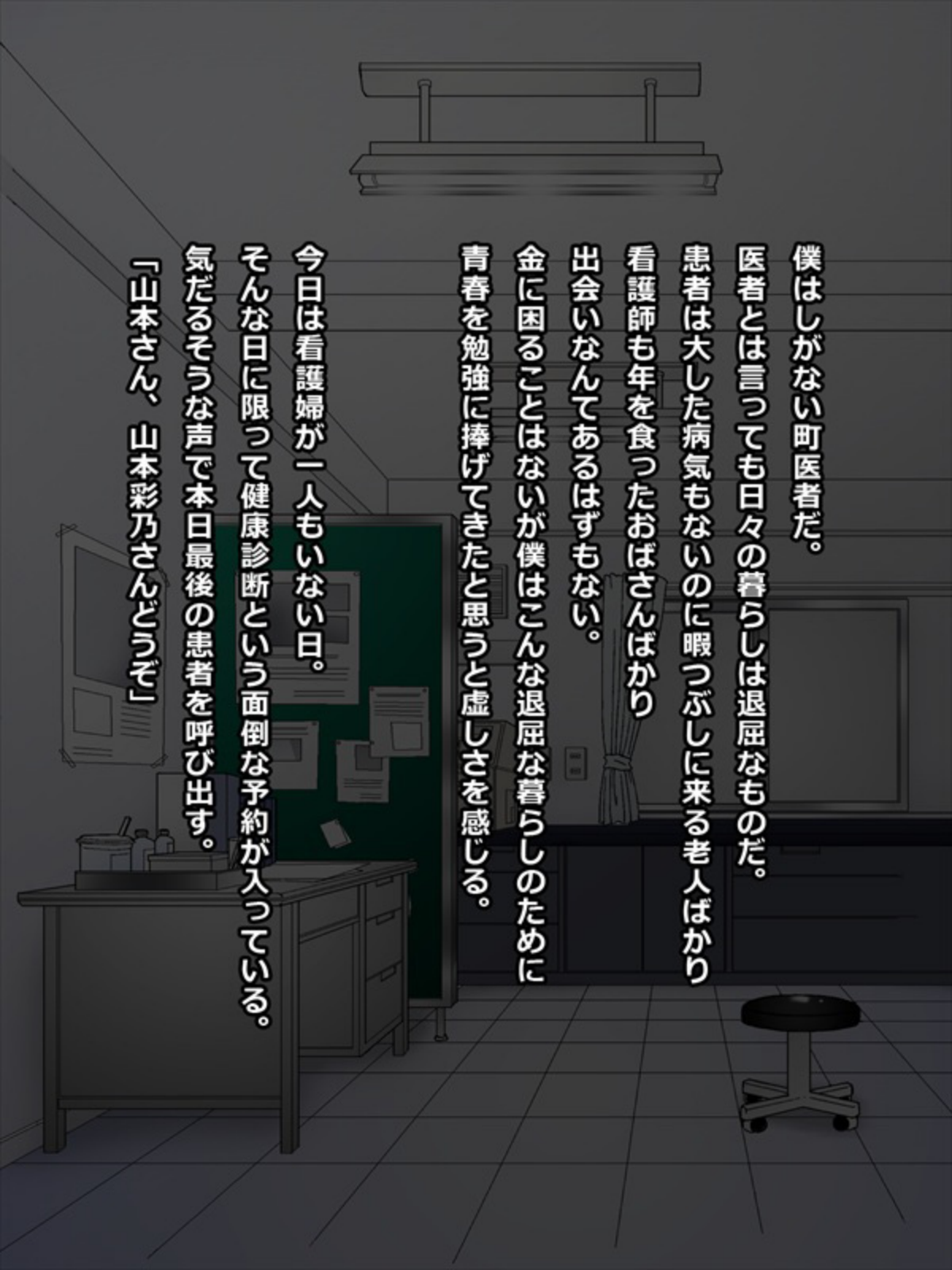




健康診断に来たロリ巨乳&  
その母親までモノにする



僕はしがない町医者だ。

医者とは言っても日々の暮らしは退屈なものだ。

患者は大した病気もないのに暇つぶしに来る老人ばかり  
看護師も年を食ったおばさんばかり

出会いなんてあるはずもない。

金に困ることはないが僕はこんな退屈な暮らしのために  
青春を勉強に捧げてきたと思うと虚しさを感じる。

今日は看護婦が一人もない日。

そんな日に限って健康診断という面倒な予約が入っている。  
気だるそうな声で本日最後の患者を呼び出す。

「山本さん、山本彩乃さんどうぞ」

診察室のドアを静かに開けて小柄な女の子が入ってきた  
ペコリと会釈して近づいてくる彼女に違和感を感じた。

(何だろっこの違和感は？何が違うんだこの娘は)

太っているのかと思ったがそれは違った。

乳房が極端に大きいのだった。

ぽよん



「ふっふっふっくお願いします……」

礼儀正しい良い子そっだがおっとりしていて世間知らずな印象も受ける  
そんな彼女の大きな乳房を見ていると僕の心の中で悪魔が囁く

辛い看護婦もない。

こんな機会はこちらからの人生で二度とないかもしれない。

僕は初めて医者という立場を濫用することに決めた。



診察が終わった後も待合室に溜まっている老人達を半ば無理やり追い出し、  
診療終了の札を出した。

「待たせてごめんね 今日君が最後だから気を使わなくてらさよ」  
「ありがとうございます」

「健康診断と…身体測定もやってないのかな？」

「はい…風邪で休んじゃって…」

「じゃあまず身長と体重から測らうか」

「はは」



「服は脱ぐかい？体重は軽めに量れるけど」

「えっ！？いいです着たままで…」

少し迷いつつも恥じらいが勝ったようにそう答えた。

この道服は脱いでみるのだから

それは楽しみだわってお母さん。



「身長145cm 体重50kg うん、健康的な数値だね」

「っ…」

男の医者に少し重めの体重を読み上げられるのが恥ずかしかったのか  
顔を赤らめてうつむいている

重いのは大きな胸のせいもありそうだが。

さて次はいよいよハツハツに張ったシャツの  
中身を見せてもらおう。



?

「次は胸囲測定だね」

「きよ…きよ…きよ…」

今は実施されていないだろうが僕の時代にはまだ行われていた胸囲測定  
女子の胸囲を測る光景は想像する度に興奮したものだ。

「胸の大きさを測るんだよ だからちゃんと測るために服は脱ごうね」





「今まで測ったことないですよ……っ」

「彩乃ちゃんの学年から測るんだよ 休んでたからわからないと思っけど」

「そうなんですか……」

やはり素直でいらすと、悪く言えば騙されやすいタイプだ。

彩乃ちゃんは顔を赤らめながらゆっくりとブラウザのボタンを一つずつ外し始めた



ブラウスを脱ぎ去ると小さな身体に不釣り合いなほど  
大きな乳房が現れた

その大きな塊を包み込む純白のスポーツブラは  
あどけなさといやらしさを醸し出して来る





「おお……じゃあブルンもはっぴー」

「ブルンも……ですか……」

「うん そうしないとちゃんと大きさを測れないから」

「ほら……」



やん

まくりあげるようにブラを脱ぐと

だぶんと音が聞こえそうな勢いで大きな乳房がこぼれた

瑞々しい肌につくりとした乳輪。しかし先端には乳首がない、いわゆる陥没乳首だった。

恥ずかしくて隠える度に胸もぶるぶると揺れる様がかわいらしい。

たまらない光景だ。



「あ…早く測ってくださったわさ…」

「今メジャー持ってくるから待っていてね」

さて初めての胸囲測定をどう楽しもうか

あれこれ考えている中彼女が陥没乳首だったことを思い出し  
名案を思いついた。



「おはちちゃんも胸は乳首なんだね」

「かまぼこ」

「おはちちゃんの先にある乳首が中々隠れてるからさあ」

「無いんじゃないですか」

「これは乳首が無いんじゃないよ」

「隠れてるだけなんだよ」

「そっなんですか」

「じゃあ隠れたらおはちちゃんも胸田が測れなから」

「乳首を出してみようね」

「えっ」

ゆさっ

ふんっ

まずは聴診器を乳房にめり込むほど押し当てる

「んっ」

こんなに強く当てても心音が聴き取りづらいのは  
初めてだが微かに聴こえる心音はやや速めだった。

さすが規格外の爆乳だけある。

むいっ



大ももを開くとぷっくりとした大陰唇がくちめりと音を立てて開き  
ピンク色の肉が姿を表した。蒸れた生ぬるい空気がとせは甘酸っぱいにおいが  
鼻孔をくすぐる。

ニャー...

膣口はわずかに亀裂の入った薄い粘膜が覆われている。

これが処女膜というものだろうか

生で見たのは初めてだ。



「認められるわけありません！

まだ 娘にこんなことして…

警察に連絡させていただきます！」

「困りましたね

そうされるのであれば

僕はこの写真をめりめるといって公開しますよ

そうなれば今後騒がけいじりいなくなり

家庭が崩壊してしまいかも知れませんね」



「んっ…」

「それは僕も避けたいんですよ  
僕はムシヨ行きあなた達は家庭崩壊  
誰も幸せになれません。」

わかりました。

お母さんが僕の「ムシヨ」を聞いて下されば…

彩乃ちゃんのことば諦めこの写真も処分しまじゅん「



「私に何をしろと……」

「何、簡単なことですよ

一度僕の相手をして下されば

それでいいんです」

「あなた……最低だわ……」

「そんなこと言っても

心の底では望んでいたんじゃないんですか

あなた娘さんの人メ撮り写真を見た時に

一瞬羨ましそうな顔をした

ご主人ともご無沙汰なんでしょう？」

ご主人ともご無沙汰なんでしょう？」



ぼつてりした唇を開き僕の亀頭を頬張る

「どうです？久しぶりのちんぼの味は」

「黙って下さ〜」

(なんて濃い匂い…頭が痺れそう…)

んっ…

そのむなしい態度とは裏腹に「丁寧」にしゃがんでくれる  
JJJJJJJ 献身的なJJJJJJJ 親父がしゃがんでくれるんだ。

んっ…

奉仕されている間手持ち無沙汰なので  
巨大な乳房を揉んでみる。  
なるほど。彩乃ちゃんのような瑞々しい弾力は  
ないがその分たふたふとして柔らかい。

長らく刺激を受けて来なかったでせう...

熟した乳房の感覚を呼び戻すように揉みほぐしてやる

「んっっ...」

ふたふた  
んんん

たろん

たろん

